

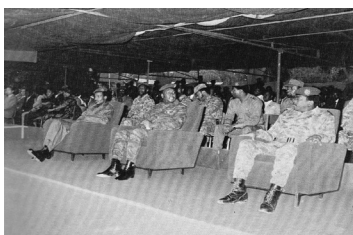
ヨンビ＝オパンゴ4代大統領の軌跡 ②

前号に引き続いて、今年3月30日、新型コロナウイルスで亡くなったコンゴ4代大統領ヨンビ＝オパンゴ (Jacques Joachim Yhombi-Opango) の軌跡をたどっていききたい。政治家として、独立以来さまざまな時局に関わってきた彼の生涯を通じて、コンゴがたどってきた歴史を見ることができる。

「コンゴ労働党軍事委員会 (Comité militaire du Parti Congolais du Travail)」の長になったヨンビ＝オパンゴは、1977年4月、大統領に就任するのだが、その2年後には同委員会や党からも糾弾され、政権の座からおりることになる。

オパンゴの政権はそもそも当初から不安定な材料が多かった。まず、前政権下で急速に進めていった社会主義路線によって、国の経済が悪化の一途をたどっていた時期と重なっていた。就任直後から、彼がフランスやアメリカなどに歩みを寄せたのにはそうした背景があっただろうし、同時にそれによって党内で反感を買ったとも言えるだろう。汚職も多かったようだ。また、前大統領の暗殺事件以降、国を二分する南北の対立がより表面化し、社会的に不安定な状況にあった。そして、彼の大統領の立場自体が憲法で裏付けられていたわけではなかったことも、短命な政権の要因ではなかっただろうか。

独立以来コンゴでは、それまで憲法が3回変わってきた。最初の憲法の制定は1963年のことで、ユールー初代大統領の政権下であった。その第一条では、「独立国家」「国の不可分」「政教分離」「民主主義」「法の下での平等」「信教の自由」「男女同権」などが明記され、国のスローガンとして「統一、労働、発展」が謳われていた。次いで、マサンバ・デバ大統領が失脚した翌年の1969年、マリャングアビ大統領の下、共産化に舵を切ったことにより新たな憲法が制定され、そこでは国名を「コンゴ人民共和国」と変更、また国歌や国旗の変更、コンゴ労働党 (PCT:Parti congolais du travail) の単一政党制が明記されている。さらに、1973年には同じくングアビ大統領の下で改正され、3番目の憲法となり、社会主義化路線の継承とともに、大統領の権限や国会、国務院などの役割が明記されている。



コンゴ労働党軍事委員会

1977年、オパンゴが大統領に就任したときの憲法はこの3番目の憲法であるが、彼の就任自体は大統領暗殺という特殊な状況のなかで行われたものであり、彼の「立場」を保障する条文は存在していなかった。就任直後に制定された党軍事委員会の基本方針には、憲法の一時停止、また国を統括するのは軍事委員会と明記され、その長 (Président) がコンゴ労働党の党首となり、同時に国の代表となると決められていた。こうした背景もあり、この暫定的とも言えるコンゴ労働党軍事委員会の決定によって、1979年2月、わずか2年弱の年限を経て、大統領を辞するのであった。その後を継いだのが同委員会のナンバー2で、同じボン族で、同郷でもあるサスンゲソであった。

大統領を辞職した彼は、ブラザヴィルにおいて政府の監視下におかれる。彼の財産は没収され、居住していた家は党の施設

として使用されるようになった。その住居はかなり豪華な造りだったようである。また、彼が失脚時に保有していた物品が公表された。「布製のトランク28個、宝宝箱7個、ブランドのスーツ40着に靴60足」などとリストアップされた。そして、これらすべては国によって没収された。

5年後の1984年、ようやく生まれ故郷のオワンド (Owando) に戻れるようになる。そこでどのような活動をしていたのかは定かではないが、87年7月には、政府転覆を扇動したという容疑で再度拘留されることになる。当時サスンゲソ大統領による一党独裁体制が続いていた。したがって、独立以来続く民族の違いに依拠する南北の対立といったものだけでなく、出自とは関係なく、独裁体制との「距離」に拠る対立もあったのではないだろうか。しかし、それから3年後、90年代になると国は急速に複数政党制、選挙といった民主化へ路線を切り替えることになる。それはまた、南北の対立を再燃させるのだった。

東西冷戦が終了したことによって、とくにソ連の崩壊によって、共産化したアフリカの諸国がその後ろ盾を失ってしまった。そこで西側諸国に援助を求めようになるのだが、援助と引き換えに民主化の要求を突きつけられたのである。コンゴも他国と同様に、暗殺されたングアビが創設したコンゴ労働党という一党体制から複数政党制へと移行することになる。そしてこの動きのなかで、拘留されていたオパンゴは釈放された。

政界にすぐに復帰した彼は、自らの政党を結成する。また、大統領失脚時に没収された財産を取り戻す裁判を起こし、勝訴した彼は10億CFAとも言われている賠償金を勝ち取っている。

1992年、大統領選挙に立候補するがあえなく敗北する。この選挙で選出された南部出身のパスカル・リスバ (Pascal Lissouba) と同盟を結び、94年から96年まで首相を務めることになる。しかし、97年6月から10月にかけて、アンゴラの援助を受けたサスンゲソとリスバ大統領との間で武力衝突が起きてしまう。サスンゲソ側が勝利すると、大統領側についていたオパンゴは国内に留まることはできず国外に逃亡。ガボンやコートジボワールを経てフランスに亡命することになった。

2001年11月、国の経済に危機を招いたということで、被告人不在のままオパンゴに対する裁判が行われ、20年間の強制労働の刑が決まった。国の石油の利益の横領がとくに糾弾された。そして6年後、国民選挙を経て大統領の座に正式に返り咲いたサスンゲソの恩赦によって、オパンゴの亡命生活に終止符が打たれたのである。2007年8月、オパンゴは再び祖国の土を踏むことができた。68歳になっていた。自身が作った政党は息子に任せ、政界から退き、コンゴとフランスを往来する余生を過ごしていたようである。

植民地時代から始まるヨンビ＝オパンゴの生涯は、独立や冷戦、部族間衝突、共産化、独裁制、民主化、複数政党制、内戦など多くのアフリカ諸国が経験した歴史と重なってくる。そこには旧宗主国との緊密さも見え隠れする。ちなみにコンゴの憲法は、その後の政変が重なるなかでさらに4回変わり、現在の憲法は2015年10月の国民投票によって承認されたものだ。この憲法改正によってサスンゲソ現大統領は3期目を迎えることができている。